

第3部会

ヘーゲル祭祀論の射程

石川 和宣

ヘーゲルは晩年一八二七年の宗教哲学講義の末尾に配置された祭祀論において、「哲学とは絶えざる祭祀のようなものである」と述べている。この記述は旧版の編集においては除かれていたため、まだ十分に解釈されていない。本発表ではこの言及を二七年講義第一部の構造から解釈することによって、これまで知られることのなかったヘーゲル哲学と祭祀論との緊密な連関について考察するものである。

上述の言及があるのは二七年講義だけであるということから、最も大部であり、旧版の祭祀論が主に依拠していた二四年講義との比較によって、二七年講義の独自性を探る。この比較によって大きく際立つのは、一、「信仰」概念の変容と位置づけの変化、二、「意志」の強調である。

一、二四年の祭祀論では、信仰が祭祀の基盤であり、その実現が祭祀の目的であるとされる。ここで言われる信仰とは奇跡や権威などの外的要因によって強制されるものではなく、あくまで自己に内在的な啓示によって確証されるものでなければならぬ。ヘーゲルはこのような自己関係を「私の精神の証言」と呼んでいる。しかし人間は様々な「自然的規定性」に囚われているため、この自己関係を十全な形で実現することができない。ここに祭祀の必要性が生じる。祭祀の本質は外的ないしは

内的な自然的規定性の放棄である。前者は「供儀」において、後者は「贖罪」において実現する。贖罪において人間は自己の有限な主観性を放棄し、神に委ねる。そのようにして純化された主観が神と関係するとき、精神の証言としての信仰は成就するとされる。それに対して二七年では対照的に、信仰は宗教における実践的關係としての祭祀の基盤ではなく、表象等と並ぶ理論的關係の代表として位置づけなおされる。

二、信仰概念の変容に伴って、祭祀と信仰の間には対立が際立つようになる。二七年で新たに祭祀の基盤となるのは信仰ではなく、「神だけが現実であるから、私は神において私の真理と現実を持つべきである」と確信的に意志することにあるとされる。二四年と最も異なるのはこの「私の真理と現実」の保持である。自己関係としての信仰は結局のところ対象への没入であり、自己忘却としての関係の解消である。「人間意識の神への関わり」としての宗教において重要なのはこの「関係」である。二七年のこうした設定においてクロースアップされるのが、制限的意志という独特のコンセプトである。ヘーゲルは通常無制限的と見なされる意志にむしろ制限性を見て取る。意志が制限的であるというのは、意志し欲望することによってはじめて「私」は対象でないものとして限界づけられるからである。二七年の祭祀論ではこの制限的意志が活用されることによって神と人との絶対的關係が求められるようになる。

宗教的に行為する主体は、その祈りや自己放棄においてもなお、神との関係を樹立せんとする意志に導かれている。その意志は自らの意志を放棄しようとする意志であるから、意志の放

棄は意志の消滅を意味しない。このような形で特殊性から浄化され、純化された主体は、神のうちにありつつ、なおかつ意志する主体として保持される。この構造は『エンツユクロペディ』で語られた「客観的思想」と類比的な関係にある。「思考」は経験の対象から特殊性を剥ぎ取ることによって普遍性へと高め、それを「思想」として我有化する。つまり考えることによつて私は対象の許に居合わせつつ、私自身の許にも居合わせているのである。ヘーゲルの意味で「自由」と呼ばれるこの構造を、哲学と同様に祭祀もまた備えている。この意味で、哲学と祭祀の類比的性格は語られるのだと考えられる。

ヴァイマル期ドイツの宗教思想

宮嶋 俊一

ヴァイマル期ドイツの宗教的・思想的状況は、これまで以下のように特徴づけられてきた。まず伝統的なキリスト教教会において様々な動きがあったことは確かだが、全体としてその力は弱まった。だが「宗教」そのもののへの関心は高く、様々な宗教・精神運動がキリスト教教会の外部で盛んになった。また、とりわけリベラルなプロテスタンティズムを背景として、今日我々が宗教学と呼ぶ営為が展開した。そうした状況下でフリードリッヒ・ハイラーも活動していた。

ハイラーは宗教学者であると同時にドイツ高教会運動におい

て指導的な役割を果たし、この運動の理論的支柱ともなる「福音主義的カトリック性」という思想を鍛え上げていった。ここでいう「カトリック性」として、それが普遍性を意味すると同時に雑種性、すなわちカトリシズムの中には歴史的に様々な宗教の要素が存在していることが指摘される。それゆえ厳しく制度化され、画一化されたローマ・カトリックの対極にあるとされる。また「福音主義的」とは、個人的・内面的な宗教性をその特徴とする。そして、その両者が統合されることにハイラーはキリスト教の理想を見出している。

一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、ハイラーは「闘争」の中に置かれるが、その相手の一方は当時のローマ・カトリック教会であり、もう一方はナチズムに迎合していくキリスト者たちであった。そして両者に対する批判は内在的に結びついている。ハイラーにとって、「カトリック」とは普遍的・エキュメニカルであり、その本質において超国家的なものであつて、その中には多様なものの統一が見られるという。その「雑種性」の中には元来、ナショナルな要素が含まれておりながら、しかもその本質は統一されている。そしてハイラーはローマ・カトリック教会の中央集権主義的姿勢を批判する。ローマ・カトリック教会は確かに統一されているが、しかしそれは閉鎖的に組織化されたものであり、それゆえカトリシズムが本来持っていた多様性を失っているからである。そして、それぞれの民族による言語を用いた典礼の必要性を説く。ゆえにここでハイラーは、ゲルマン的キリスト教という考え方に對して肯定的な評価を下す。しかしながらハイラーは、当時の「ドイツ